東 京 大 学

東洋文化研究所概要

昭和43年6月

C3
45
543

東京大学東洋文化研究所

東京大學圖書
<10>6470040020
東京大学東洋文化研究所

東洋文化研究所（昭和43年増築工事中）

東洋文化研究所

Ⅰ 沿　　革

本研究所は，昭和16年11月26日，勅令第1,012号をもって，東京帝国大学に附置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で発足したが，官制公布後まもなく太平洋戦争の勃発により，拡張計画は中絶し，戦後ようやく昭和24年1月にいたって新たに3部門が増設された。その結果，部門組織を細分して，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門および経済・商業部門の6部門に再編成した。ついで昭和26年に文化人類学と人文地理学，さらに昭和35年には，研究体制を地域区分に対応させて整備する将来計画にもとづき，南アジア部門，昭和39年に東北アジア部門が増設され，昭和43年に西アジア歴史・文化部門が新設されて，計11部門を擁することとなった。なお，昭和41年には東洋学文献センターが附属研究施設として設置された。

Ⅱ 目的と構成

本研究所は，日本を含むアジア諸地域の政治・経済・社会・文化などの組織的，総合的研究を目的としている。もちろん，現在の程度の規模をもってしては，広汎なアジア諸地域における諸般の問題を同時に究明することは望みえないので，研究者の専門にしたがって，重点的に課題を選ぶとともに，各専門分野の孤立を避けるため，合同の研究会によって研究者間に共通の問題意識を育てつつ，個別的には達成しがたい総合研究の実を挙げるよう努めている。また，研究陣容の補強を図るため，毎年の研究計画に従って，学内および学外からも専門研究者に研究を委嘱し，研究班に協力を求める方針をとっている。アジア諸地域の研究が，戦後はとくに問題山積の状況にあり，今後とも重要性が増大する一方であること，本研究所が現在，アジア研究のセンターとして，本学に

A33383

特設された唯一の研究機関であることを考え合わせると，この程度の組織機構では，まだいかにも不十分である。従来日本の学界に蓄積の乏しい領域を開拓すべき研究者の養成に努力しつつ，地域全体を対象とした初期の学科別部門編成から，さらに東アジア，東北アジア，東南アジア，南アジア，西アジアおよび内陸アジアのような地域区分にしたがって，これらの研究部門を整備し得る規模にまで陣容の拡大されることを期待している。

教　職　員

教　官

汎アジア経済

教授　川野重任　　講師　山田三郎

汎アジア人文地理学

教授　大野盛雄　　講師　高橋　彰

汎アジア文化人類学

教授　泉　靖一　　助教授　中根千枝　　助手　松谷敏雄

青木　保

東アジア政治・法律

助教授　関　寛治　　松井　透

東アジア歴史

教授　佐伯有一　　助教授（休）松本善海　　助手　浜島敦俊

加藤祐三

東アジア美術史・考古学

教授　鈴木　敬

東アジア哲学・宗教

教授　窪　徳忠　　講師　鎌田茂雄　　助手　蜂屋邦夫

東アジア文学

教授　築島謙三　　助教授　尾上兼英　　助手　山之内正彦

南アジア政治・経済

教授　荒　松雄　　（併）山本達郎　　助教授　山崎利男

助手　長崎暢子　　池端雪浦　　月輪時房

東北アジア

教授　橋本秀一　　助手　梶村秀樹

西アジア歴史・文化

教授　小口偉一　　助教授　深井晋司　　助手　江島恵教　　黒田和彦

佐藤次高

職　員

事務長　宮本　健　　総務主任　大嶋真治

庶務掛　　掛長　千代延哲男　　事務官　五木田浩　　館野照政

用務員　溝呂木静雄　　橋本公治　　竹内竹司

会計掛　　掛長　（併）大嶋真治　　事務官　花島　栄　　吉沢国太郎

赤沢トキ子　　小沢敦美　　技官　和田秀雄

図書掛　掛長　植谷忠雄　　事務官　江原千代子　　中村隆治　　中村摩利子

中田　実　　中村敬子　　半沢哲郎　　風間　勉　　長野　真

小野悠紀子

調査掛　主任　今城治子　　事務官　羽石咸子　　佐多正子　　森みどり

技官　古山　学　　千代延恵正　　木村源蔵

Ⅲ　設　　備

1.　建　　物

本研究所は，当初，本学構内に建物をもつことが予定されていたが，戦争の拡大により計画の実現が不可能となったので，暫時，本学附属図書館内に研究室，書庫，事務室を置いた。昭和23年４月１日，外務省所管の東方文化学院の解消をみるに及んで，同年７月に同学院東京研究所の所在地であった大塚に本

拠を移すこととなり，外務省研修所と同居という暫定的な形で，旧学院の建物の一半を使用し，従来利用していた附属図書館研究室の一部を分室とした。このように，研究施設としてまことに遺憾の多い状況のまま20年余を数えるにいたったが，さいわい本学構内に建物を新築する計画が具体化し，その第1期工事の完成にともない，昭和40年10月に研究室の一部と事務室が移転した。さらに，昭和42年3月には第2期工事が完成したので，残りの研究室，書庫，図書事務室，および東洋学文献センターが移転した。昭和43年度には，総合研究資料館の増設にともなう第3期工事として，研究室，事務室や書庫の一部が改築移転した。

2. 図　　書

本研究所に収蔵する図書資料は総数260,000冊に及び，平均年間約5,000余冊ずつ増加している。収蔵するに至った主なものをあげると，創設当初，大木幹一氏から中国法制関係書を主とした漢籍45,000余冊の寄贈があり，附属図書館からも相当数の東洋学関係書が移管された。東方文化学院解消後は，同学院蔵書10数万冊（和漢洋）をも使用することとなった。また，帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない，戦後その蔵書2,000冊（和漢洋）の移管を受けた。文部省科学研究費交付金による購入書としては，昭和25年度に松本忠雄氏旧蔵の東亜外交関係書3,000余冊（和漢洋），同26，28年度に長沢規矩也氏所蔵の多数の希覯書を含む中国戯曲小説関係書3,000余冊（漢）があり，さらに同27,28両年度には矢吹慶輝，清野謙次両氏の旧蔵書800余冊（洋）を購入したが，これは前記帝国学士院からの移管書とともに人類学・民族学関係の重要資料となっている。また昭和33年度から昭和40年度まで，文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会」および特定研究「アジア・アフリカ地域研究」の一環として関係資料を多数蒐集した。昭和27年度から5ヶ年にわたり下中弥三郎氏より，主として戦後中国・朝鮮で刊行された人文・社会科学関係書4,000余冊の寄贈を受けたが，その後もこの関係の書を鋭意継続して蒐集している。な

お，昭和38年に，東京銀行調査部から主として経済関係の図書15,000冊（和漢洋）の寄贈を受けた。

Ⅳ 刊　行　物

1. 定期刊行物

(1) 東洋文化研究所紀要　昭和18年12月に創刊，同42年度に第44冊から第46冊まで刊行し，本年度は第47冊から第49冊まで刊行する予定。第10～12の3冊と第25～28の4冊は，それぞれ本研究所創立15周年並びに20周年記念号であり，第41～44の4冊は創立25周年記念号である。

(2) 東洋文化　昭和19年10月に創刊し昭和24年5月にその第11号を発行した「東洋文化研究」を継承したもので，昭和25年2月に創刊，同42年度に第44号と45号を刊行し，本年度は第46号と第47号とを発行する予定。

2. 報　告　書

(1) 東京大学東洋文化研究所紀要別冊

		発行年月
仁井田　陞	中国の農村家族	27. 8
周藤吉之	中国土地制度史研究	29. 9
大林太良	東南アジア大陸諸民族の親族組織	30.10
結城令聞	世親唯識の研究　上	31. 1
関野　雄	中国考古学研究	31. 3
窪　徳忠	庚申信仰	31.11
仁井田　陞	中国法制史研究　刑法	34. 3
仁井田　陞	中国法制史研究　土地法・取引法	35. 3
米沢嘉圃	中国絵画史研究	36. 3
結城令聞	唯識学典籍志	37. 3

仁井田　陞	中国法制史研究　奴隷農奴法・家族村落法	37. 3
築島謙三	文化心理学基礎論	37.11
窪　徳忠	庚申信仰の研究　年譜篇	37.12
仁井用　陞	中国法制史研究　法と慣習・法と道徳	39. 3
鎌田茂雄	中国華厳思想史の研究	40. 2
江上波夫	アジア文化史研究　要説篇	40. 3
泉　靖一	済州島	41. 3
江上波夫	アジア文化史研究　論考篇	42. 3
鈴木　敬	明代絵画史研究・浙派	43. 1

V　東洋学文献センター

昭和41年4月，本研究所の附属研究施設として，東洋学文献センターが設置された。本文献センターは，とくに旧中国の政治・法律および文学・演劇関係の図書，戦後中国および朝鮮の刊行物を収集し，本研究所所蔵漢籍の印刷目録を作成するなどして，広く研究者の利用に資することをめざしている。昭和41・42年度に収集した資料は，図書1,849点，3,769冊，マイクロフイルム20点，17リール，文書類500枚であるが，昭和42度には故仁井田陞博士所蔵のギルド関係を中心とする資料を購入し，本年度も引続いて購入して，合せて図書934冊，中国古文書902枚を収集する。

昭和42年度より，本文献センターの広報誌として「センター通信」を，シリーズ刊行物として「東洋学文献センター叢刊」を発行し，関係方面に配布している。「叢刊」の第1輯としては「東洋文化研究所新収図書目録（昭和41年度)」，第2輯として「清代地方劇資料集(1)」を刊行した。

Ⅵ　海外学術調査

本研究所が海外で行なっている調査研究事業は，つぎのふたつである。

1　江上波夫元教授を団長とする東京大学イラク・イラン遺跡調査団は，昭和31～32年，34年，35年，39年，40～41年の5回にわたって，イラクおよびイランにおいて9カ所の古代遺跡の発掘を行ない，「文明の起源とその初期の様相」の問題という人文科学における世界共通の現代的課題の解明に努力し，また「東亜及び日本古代文明の源流としての古代イラン文明」というわが国にとって特別関心ある問題の究明に努めてきた。

昭和41年度よりわが国に将来した発掘資料，採集資料等の研究，報告に全力を投入して，イラン国デーラマン地方ハッサニ，マハレ，ガレクティ1号丘，2号丘の諸遺跡のうち歴史時代に属するものの研究，および上記諸遺跡の人骨の研究を行なった。前者は『デーラマンⅢ』として昭和43年3月に刊行した。後者は『西アジアの人類学的研究Ⅱ』として近く出版される予定である。本年度は，昭和39年に発掘したイラク国のテル・サラサート2号丘の資料と昭和40～41年に発掘したテル・サラサート5号丘の資料を研究する計画である。

東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書

テル・サラサート　Ⅰ	33. 3
マルヴ・ダシユト　Ⅰ	37. 3
マルヴ・ダシユト　Ⅱ	37. 3
フアハリアン　Ⅰ	38. 3
西アジアの人類学的研究　Ⅰ	38.11
デーラマン　Ⅰ	40. 3
デーラマン　Ⅱ	41.11
デーラマン　Ⅲ	43. 3

2　東京大学インド史蹟調査団は，山本達郎併任教授（団長）・荒松雄教授・月輪時房助手・大島太市研究委嘱を中心に，13世紀から16世紀に至るインドのイスラーム系建造物に関する調査研究を目的とし，昭和34，36年の２回にわたって，デリー周辺地域における諸遺跡，とくに墓，モスク，水の利用に関する建造物などを調査し，その後それらの整理，研究を行なってきた。その成果は『デリー，デリー諸王朝時代の建造物の研究』，「第一巻　遺跡総目録」および「第二巻　墓建築」として，それぞれ昭和42年３月と昭和43年６月に出版された。

本年度は，報告書の第３冊「第３巻　水利施設」を出版する予定である。作業内容としては，資料の整理，とくに各種遺跡の状況・平面・立面・断面等の諸図の作成が主たるものであり，研究面では，山本・月輪・大島が建造物の構造と様式上の問題を研究し，荒が遺跡建造物の歴史的背景を究明している。

附表１　昭和42年度研究会

昭和42年

4月20日	インド中観学派における空	江島　恵教
	吉蔵の八不中道観	泰本　　融
4月27日	道教経典にあらわれた空	鎌田　茂雄
	天台における空仮観	塩入　良道
5月4日	共通課題——旧小説の世界	
	神魔小説は霊怪	木山　英雄
	人情小説は煙粉	尾上　兼英
5月11日	共通課題——唐代の詩と詩人	
	貶謫の詩人たち	前野　直彬
	李商隠詩の一側面——その「恋愛」について——	山之内正彦
5月18日	太平天国革命諸問題	小島　晋治
5月25日	洋務運動の一側面	中村　　義
6月1日	南宋院体画について	鈴木　　敬
6月8日	金代絵画に関する二三の問題	戸田　禎佑
6月15日	文化大革命と中国研究	菅沼　正久
6月20日	〈京都大学人文科学研究所講師交換研究会〉	
	元代散曲における詠物詩の展開	田中　謙二
6月22日	社会主義建設の論理と「社会主義経済学」——プロレタリア文化大革命についての一視角——	常盤　絢子
6月29日	新中国の経営管理方式について	佐伯　有一
9月14日	古墳時代の終末に関する諸問題	甘粕　　健
9月21日	日本におけるバハイズム	小口　偉一
	昭和10年代の日本文化論——和辻哲郎を中心に——	生松　敬三

9月28日	政教分離の諸問題 ——日米の文化的背景の相異をめぐって——	井門富二夫
	仏教小教団の独立過程 ——明治前期の事例について——	森岡　清美
10月5日	土地改革の概念	滝川　　勉
	台湾工業化の条件	川野　重任
10月12日	朝鮮の親族構造の問題点	泉　　靖一
	近世チベット貴族層の展開	中根　千枝
10月19日	アジアにおける錫の生産とその問題点	山田　三郎
	パキスタンを尋ねて	逸見　謙三
10月26日	清初の満州族社会の諸問題	神田　信夫
	モンゴル遊牧国家の一性格	村上　正二
11月2日	「地域社会」の調査研究をめぐる問題点 ——イランの農村の事例——	大野　盛雄
11月16日	「アラブ社会主義」の階級認識	板垣　雄三
	「アラブ社会主義」の経済体制	中岡　三益
11月30日	古代メソポタミアにおける日乾煉瓦	堀内　清治
	インド仏教にみられる西アジア的要素——特に「燃灯仏本生と弥勒菩薩」の造形的表現を中心に——	杉山　二郎
12月7日	古代バビロニアにおける「中間期」について	黒田　和彦
12月14日	ムスリム支配期インドの土地制度にかんする最近の研究について	松井　　透
1月18日	インドから帰って	長崎　暢子
	イギリスの対インド帝国主義支配をめぐる諸問題	中村　平治
1月25日	大戦下におけるインドの経済過程	古賀　正則
2月1日	アソカ碑文の周辺	橋本　秀一
2月8日	英国のマラヤ支配とサルタン制	築島　謙三

2月15日　明代里甲制の編成について　小山　正明

明末清初賦役改革の政治過程　浜島　敦俊

2月22日　宋代官僚と商業——中世的デスポティイズムの成立に関連して——　柳田　節子

2月29日　春秋末期の「叛」　小倉　芳彦

附表 2　昭和43年度共同研究課題

○印　研究担当
※印　研究委嘱

Ⅰ　経済発展の基本過程　　班主任　川　野

(1)　川　野　重　任　　台湾の工業化過程
(2)　橋　本　秀　一　　セイロンの乾燥地帯開発
(3)※滝　川　　勉　　フイリピンの経済発展
(4)○逸　見　謙　三　　アジアにおける農産物貿易
(5)※萩　原　宜　之　　マラヤの経済発展と政治過程
(6)　山　田　三　郎　　ヤラヤ経済発展の多元構造
(7)　大　野　盛　雄
　※高　津　斌　彰　　日本産業の地域構造

Ⅱ　開発途上国の政治変動と国際環境　　班主任　関

(1)　加　藤　祐　三　　政治変動の歴史的研究
(2)※高　畠　通　敏　　政治変動の計量分折
(3)　関　　寛　治　　政治変動のシユミレーシヨン
(4)※高　柳　先　男　　政治変動の理論的研究

Ⅲ　社会集団の基本構造　　班主任　泉

(1)　泉　　靖　一　13世紀末における非ヨーロッパ社会の構造
(2)　中　根　千　枝　チベット社会の構造
(3)　松　谷　敏　雄　メソポタミアにおける農耕の起源から国家形成
(4)　青　木　　保　東南アジアにおける都市の形成
(5)※甘　粕　　健
　○井　上　光　貞　　日本における政治集団の形成

(6)○増　田　昭　三　アジアとの比較における先スペイン時代の核アメリカの社会構造

(7)　池　端　雪　浦　先スペイン時代のフイリピン社会の構造

Ⅳ　西アジア研究(1)　　班主任　深　井

(1)　曽　野　寿　彦　前第一千年紀初頭におけるイラン文化の形成

(2)　松　谷　敏　雄　遊牧民社会の構造

(3)　黒　田　和　彦　ハンムラビ時代の社会と文化

(4)※杉　山　二　郎　美術にあらわれた農耕社会と遊牧社会との比較研究

(5)※堀　内　清　治　古代西アジアにおけるドーム建築

(6)　深　井　晋　司　ササン朝美術の形成とその発展

(7)※石　井　　昭　初期イスラーム時代の建築

Ⅴ　西アジア研究(2)　　班主任　大　野

(1)　小　口　偉　一　西アジアにおける民族と宗教

(2)※加　賀　谷　寛　現代イスラムの構造

(3)　荒　　松　雄　イスラム史における政治権力と宗教

(4)　佐　藤　次　高　イスラム封建制

(5)※板　垣　雄　三　アラブ民族主義の史的展開

(6)※岡　崎　正　孝　近代イランにおける土地制度
——とくに19世紀を中心に——

(7)　大　野　盛　雄　イラン農村の社会経済構造

Ⅵ　西アジアにおける先史文化の研究　　班主任　深　井

(1)○曽　野　寿　彦　古代西アジアにおける町邑文化の成立

(2)　深　井　晋　司　彩文土器にみられる図像学的研究

(3)※池　田　次　郎　古代西アジアの人種問題

(4)※増　田　精　一　イラン高原における彩文土器の文化

Ⅶ　インドにおける支配体制と社会構造　　班主任　荒

(1)　山　崎　利　男　古代インド社会の変貌

(2) 荒　　松　雄　中世インドにおける政治と宗教

(3) 松　井　　透　イギリス植民地支配とインド社会

(4) 山　崎　利　男　英領インドにおける司法制度

(5) 長　崎　暢　子　イギリス帝国主義支配と土地制度

(6)※中　村　平　次　現代インド政治における分化と統合
——政党政治の消長をめぐって——

(7) 中　根　千　枝　現代インドにおける家族制度の研究

Ⅷ　デリー諸王朝時代の建造物の研究　　班主任　荒

(1) 山　本　達　郎　建造物よりみたインドおよびイスラーム文化の交流と変容

(2) 荒　　松　雄　デリーに現存するサルタナット時代の遺跡の歴史的研究

Ⅸ　東南アジアの国家形成　　班主任　橋本

(1) 山　本　達　郎　黎朝刑律の研究

(2)※和　田　久　徳　マラッカ王国史研究

(3) 築　島　謙　三　マレー人とサルタン制

(4)※岸　　幸　一　インドネシアの村落

(5) 池　端　雪　浦　19世紀におけるフイリピンの社会構造の変化

(6) 高　橋　　彰　フイリピン農村構造の研究

(7) 橋　本　秀　一　ノックスの見た17世紀のセイロン

(8)※生　田　　滋　近世植民地の東南アジア

(8)※浦　野　起　央　東南アジアの比較政治

Ⅹ　前近代中国の政治経済の史的研究　　班主任　佐　伯

1 政治構造

(1)※小　倉　芳　彦　戦国秦漢期の政治思想

(2)※堀　　敏　一　六朝隋唐の国家権力と土地制度
——均田制を中心として——

(3) 佐 伯 有 一　明清時代における郷紳とその支配

(4)※西 川 正 二　清末の革命運動

2 経済構造

(5)○関 野 雄　先秦時代の経済機構

(6)※柳 田 節 子　宋代国家権力と郷村支配

(7) 浜 島 敦 俊　明末清初の賦役改革と土地問題

(8)○田 中 正 俊　解体期中国の経済構造

XI 中国の思想と宗教　班主任 窪

(1) 江 島 恵 教　中観思想の形成と展開

(2)※泰 本 融　中国の論理思想と仏教論理学

(3)※塩 入 良 道　中国における禅観思想

(4) 鎌 田 茂 雄　起信論と中国仏教——占察経を中心として——

(5) 窪 徳 忠　元代における三教関係

(6)※野 田 幸三郎　日本古代の儒教

(7) 蜂 屋 邦 夫　全真教の教理的研究

XII 宋元仏画研究　主任 鈴 木

(1) 鈴 木 敬　十王図

(2)※川 上 涇　羅漢図

(3)※戸 田 禎 佑　仏菩薩像

XIII 中国の思想と文学　班主任 尾 上

(1)※高 田 淳　近代思想史における章炳麟の位置

(2)○溝 口 雄 三　近代思想史における李贄の位置

(3)○前 野 直 彬　盛唐詩研究

(4) 山之内 正 彦　中晩唐詩研究

(5)※木 山 英 雄　旧小説の世界

(6) 尾 上 兼 英　明清小説研究

(7)※田 仲 一 成　中国演劇史研究

XIV 現代中国および朝鮮の研究　　班主任　佐　伯

1　1840～1940年

(1)※中　村　　義　改良主義とその史的基盤

(2)※石　田　米　子　辛亥革命史研究

(3)　佐　伯　有　一　国民党政権と農民問題

(4)　加　藤　祐　三　民族解放論

(5)○古　島　和　雄　抗日民族統一戦線論

(6)※丸　山　　昇　左翼作家連盟の研究

(7)※竹　内　　実　抗日戦争の毛沢東の思想――階級と民族――

(8)※姜　　徳　相　1930年以後の朝鮮民族解放斗争史の研究

2　1941年以降

(9)※菅　沼　正　久　半植民半封建社会における社会主義化

(10)※常　盤　絢　子　第一次五ケ年計画における重工業優先投資と大躍進政策の関係

(11)※野　村　浩　一　現代中国の内政と外交

(12)※新　島　淳　良　1949年以後の中国思想史

(13)　梶　村　秀　樹　現代朝鮮経済政策

XV 中国をめぐる国際政治　　班主任　関

(1)○坂　野　正　高　近代中国の政治過程(一)　光緒年間の条約論議

(2)○衛　藤　瀋　吉　近代中国の政治過程(二)　ワシントン体制下の日中関係

(3)　関　　寛　治　近代中国の政治過程(三)　ワシントン体制下の条約論議

(4)※藤　井　昇　三　中国革命における孫文

XVI 明代以降の文献資料の研究　　班主任　窪

(1)　窪　　徳　忠　明清宗教文献の研究

(2)　佐　伯　有　一　明清経済古文書の研究

(3)　尾　上　兼　英　明清小説資料の研究

(4)　初　見　　昇　中国新学部資料分類法の研究

(5) 陳　　明　新　中国戯曲小説資料の研究

(6) 沢　谷　昭　次　中国政法文献の研究

(7)○前　野　直　彬　漢籍目録学の研究

(8)※田　仲　一　成　清代地方劇の研究

(9)※伝　田　　章　西廂記版本の研究

(10)※丸　山　松　幸　李大釗研究史

(11)※佐　藤　　保　和刻本唐人別集資料の研究

XVII　近代日本の思想と宗教　　班主任　小　口

(1) 小　口　偉　一
○柳　川　啓　一
※井　門　富二夫
※森　岡　清　美
} 戦後における宗教集団の構造変化

(2)※生　松　敬　三　日本文化論

XVIII　日本の社会とことば　　班主任　築　島

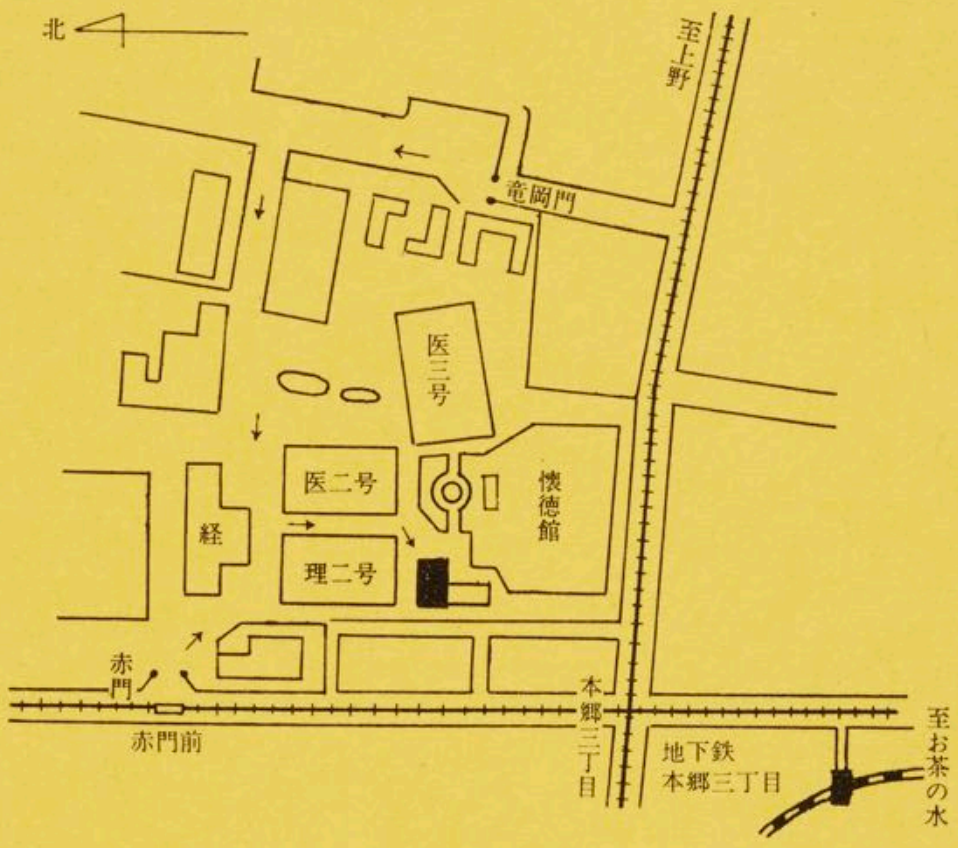
(1)○丸　山　真　男　近代政治思想におけるコトバの問題

(2)※野　元　菊　雄
○碧　海　純　一
} 社会変化と敬語

(3) 尾　上　兼　英　現代中国語の対人呼称

(4) 築　島　謙　三　外国人の見た日本語

東洋文化研究所案内図（東大本郷構内）



昭和43年6月1日 発行

編集兼発行者 東京大学東洋文化研究所

東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話（812）2111（大代表）

印刷・製本 株式会社 三陽社
東京都板橋区板橋4—47—7